

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	22220011	研究期間	平成22年度～平成26年度
研究課題名	地表環境の総理解を目指した地理空間データ蓄積共有システムの構築	研究代表者 (所属・職) (平成27年3月現在)	建石 隆太郎 (千葉大学・環境リモートセンシング研究センター・教授)

【平成25年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準
A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○	A 当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	A- 当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
	B 当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C 当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である
(意見等)	
<p>本研究は、①地理空間データ蓄積共有システムの構築、②改良グローバル土地被覆データの作成、③東・東南アジアの環境変化の理解に関する研究である。中心的研究テーマである①は、平成24年8月に初期バージョンを公開し、現在はシステムの改良中であり、順調に進展している。②については、平成24年度にGLCNMO v2が完成しており、着実に進んでいる。③では外邦図の数値化の難しさに直面しており、研究グループにおいて蓄積されたノウハウに基づき当初の目的を達成する努力が必要である。</p> <p>構築された地理空間データ蓄積共有システムは、多くのユーザーに実際に活用されることで優位性が示され、持続的に運用されることから、ユーザー拡大にさらに力を入れることが望まれる。</p>	

【平成27年度 検証結果】

検証結果	当初目標に対し、ほぼ期待どおりの成果があった。
A	<p>当初の目的の一つである地理空間データの蓄積共有システムの構築、運用及び国際展開は、CEReS Gaiaの完成によってその目的はほぼ達成できた。今後本システムについて、多くの研究者の利用を促進することが望まれる。もう一つの目的、改良グローバル土地被覆データの作成については、GLCNMO2008の作成により、より分類精度の高いデータの作成に成功した。また、分類精度を上げるために、Google Earthによるトレーニングなど複数の試行を重ね、特に優れた成果をもたらした。今後、高解像度衛星データ利用などの展開を期待したい。一方、当初副次的な目的であった100年間の環境変化については、データ蓄積が必要な段階にとどまっているので、今後のCEReS Gaiaの運用成果を期待したい。</p>